

各 位

2025年3月14日

株式会社 山と溪谷社

<https://www.yamakei.co.jp/>

すごい生き物たちに学ぶすごい生きざま！『ヤマケイ文庫 すごい動物学 生き物たちから学ぶ明日を生きるヒント』刊行

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、『ヤマケイ文庫すごい動物学 生き物たちから学ぶ明日を生きるヒント』（新宅広二：著）を2025年3月14日に刊行いたしました。



単に動物を知るのではなく「動物に学ぶ」、それがこの本で伝えたい「動物学」である。（「まえがき」より）

人生にちょっと疲れた時は、動物たちを見てみませんか？ 大学での研究、動物園、伝統の狩猟と、全く異なる角度の動物分野に従事しながら、動物の生態を見つめてきた著者独自の視点で、教科書には載っていない生き物たちの真の姿を解き明かしていきます。

シャイで奥手、ベジタリアンのゴリラ。
メスのためにラブソングを歌うカエル。
死んだふりをして逃げるオポッサム。
笑うことで争いを回避するヒト。

さまざまな動物たちの生きざまを学ぼううちに、私たちヒトもずいぶん動物的だと気づきます。常識や思い込みが覆されて、読後に気持ちがスッと軽くなる一冊です。ヤマケイ文庫化にあたり、書き下ろしの原稿とイラスト、カラー写真を収録。

まえがき

みんな動物の話題が大好きだ。

本物の動物が苦手な人でも、動物の話題には何かひと言口をはさまたくなるものだ。動物の赤ちゃんを見て心が癒され、ペットを飼うきっかけになった人もいるだろう。あるいは突然イヌにほえられたり、山でクマに出会ったりして怖い思いをした人も、また大事な農作物を荒らされたり、寝ているときに虫に刺されたりして不愉快な思いをした人もいるだろう。

このように人にとって動物とは、家族同然の思いを抱いたり、畏敬の念を感じたり、憎き害獣であったりと、生活から切っても切り離せない存在だ。しかしながら、学校では「動物」という科目はないので、誰にもきちんと教わることなく大人になってしまっている。だから、動物について誤解や思い込みも多い。本当のところはどうなのか知りたくてモヤモヤしていることが、山盛りあるのではないだろうか。

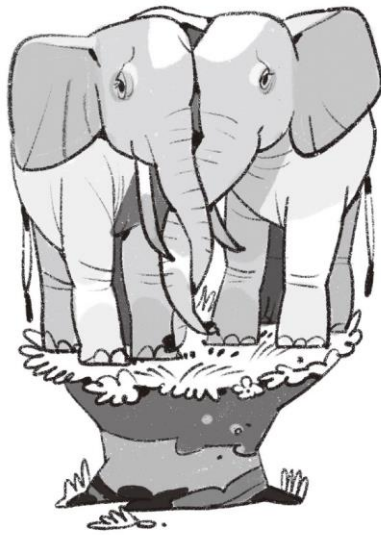
よくあるのは、知性に欠けて粗暴な人間のふるまいを動物にたとえて表現したり、動物はすべて、本能的な行動しかできないものとして表現されていたりすることだ。人が動物を語るときは常に、彼らを見下した上から目線だ。

しかし、我々は動物から学ぶことは一つもないのだろうか？ 人間は「動物力」をすべて捨て去っても大丈夫なのだろうか？ 我々が日常見聞きする動物に関する情報は、見た目や雰囲気程度の根拠から語られているようなものも多い。科学的にもさまざまなアプローチで野生動物の生態の解明が進んでいるが、解明が進むほど、新たな謎が深まるばかりである。

そういった新たな一面を垣間見ること、実は私たちが日頃悩んでいる人間関係やイジメ、恋愛、子育て、生きがいなどについてのちよつとした解決策やアイデアが見つかるのかもしれない。単に動物を知るのでなく、「動物に学ぶ」、それがこの本で伝えたい「動物学」である。

もちろん嗅覚も鋭く、乾期のわずかな地下水のおいなどもかき分けられる。鼻先もとても器用で、目に入ったゴミを鼻でとることもある。動物園に勤めていたときに実験したが、ビーナッツ程度は楽々とつまむことができた。納豆なども食べたが、コンニャクだけは少し触ったあとになぜか激怒していた。理由はわからない。重いものをつかむのもオツケ。100キロ程度のものなら鼻だけで軽々と持ち上げることができる。疲れたときは、大きな牙の上に重たい鼻をつけて休むこともしばしば。野生のゾウは、深い川を渡るときに、シュノーケルのように鼻を水面に出して泳ぎながら呼吸できる。イライラしたときは、鞭のように鼻を地面に叩きつけて大きな音を出す。また母ゾウが、衰弱した自分の子の生死を確認するときは、悲しそうに丹念に鼻で子ゾウの身体のおいをかぐ。このように、ゾウの鼻は実に多様なことに使われる。

ところで、動物園ではよく子どもたちに「ゾウって鼻毛あるの？」と聞かれるもの、答えられなかった。あの長い鼻に鼻毛があればすごそうである。ある日、寿命で死んだゾウを検死するついでに調べてみた。先端に触角的な剛毛はあるものの、鼻腔の中には毛はなかった。



ゾウ：地上最大の動物。高度な社会性と知能を持つ



かつて、どこの里山にもいた鳥のトキ。絶滅寸前種になってからの復元は難しいが、長年の研究で奇跡の野生復帰にまで至った（佐渡トキ保護センターにて）

すごい腹黒



アゲハチョウの若齢幼虫は、天敵の鳥が絶対食べない鳥の糞に擬態して身を守る

119

すごい顔ない



死を認識できるゴリラは、悲しみの表現もヒトに似ている（上野動物園にて）



動物園の動物たちのお墓はない。希少動物としてさまざまなことが調べられて、獣医学や自然保護のデータに寄与し、教育標本としても貢献してくれている（上野動物園にて）

118

【著者紹介】

新宅広二(しんたく・こうじ)

1968年生。専門は動物行動学と教育工学。大学院修了後、上野動物園、多摩動物公園勤務。その後、アフリカ、オーストラリア、北米、東南アジア、ヒマラヤなど、国内外のフィールドワークでの研究を含め、400種以上の野生動物の生態や飼育方法を修得。狩猟免許を持つ。大学や専門学校で20余年教鞭を執る。全国各地の博物館、動物園、学校等で講演。監修業では、国内外の劇場用ネイチャー・ドキュメンタリー映画や科学番組など300作品以上手掛ける他、国内外の動物園・水族館・博物館のプロデュースの実績もある。著書は、教科書、動物図鑑、実用書、児童書、知育本・絵本、科学雑誌連載、洋書翻訳まで数十冊刊行。映画、ドラマ、マンガ、ゲーム、アプリ、CMなど、監修・脚本も多数手がけ、人気の玩具シリーズ、ファッション系なども多数企画・監修で関わっている。生態科学研究機構 理事長・研究統括。

【書誌情報】

書名:ヤマケイ文庫 すごい動物学 生き物たちから学ぶ明日を生きるヒント

著者:新宅広二

発売日:2025年3月14日

定価:1,100円(本体1,000円+税10%)

判型:文庫判

ページ数:224ページ

ISBN:978-4-635-05013-5

<https://www.yamakei.co.jp/products/2824050130.html>

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当：宗像

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: info@yamakei.co.jp

<https://www.yamakei.co.jp/>